

ポラリスを仰ぐ北の大地から



ゲリラ豪雨

深川医師会 会長 林 憲雄

本年7月初め通勤途中まさしくゲリラ的な大雨を自ら体験しました。北海道の方なら車の運転中、猛吹雪でホワイトアウトの経験は多々あると思いますが、土砂降りの雨でワイパーが効なく滝に突込んだような状況で、泥水のカーテンで前が見えず走行不能一步手前となった経験は少ないのではと推測いたします。一瞬ではなく気持ち的には数分間続いたように思われ、恐怖の時間でした。地理的には国道12号線の神居古潭の近くで、ハザードを点け減速して何とか通り過ぎることができました。停車してしまうと前後左右に車が走行しており衝突する可能性もあり、また道路を濁流が流れていて車も流されてしまうのではないかとという危惧もあって徐行を続けました。普段ですと国道12号線から神納橋を通り石狩川を渡りますが、交差点が閉鎖されていて直進のみでした。やむなく直進し次の納内橋を渡ろうとするも、やはりそちらも閉鎖されていて石狩川の水位が甚だしく上昇しているのかと大変不安になって来ました。さらに直進し、深川ICから下りてくる深川橋に繋がる交差点は右折可で、やっと石狩川を渡ることができました。神納橋から納内橋の間の石狩川沿いの地域を内園とっていますが、田畑が冠水して被害を受けたと後に分かりました。小生が車で移動していた時まさに洪水が起こっていたと思うとゾッとします。何とか病院にたどり着きましたが、病院の北にある多度志でも雨竜川が氾濫し、職員の自宅が浸水しそうだとの報告も受けました。今年に入り、すでに全国各地で風水害があり、被害が多発し、お亡くなりになった方々もおられ、心からご冥福を申し上げます。備え有れば憂い無しと言いますが、今後充分に対応できるように地元医師会も改めて対策を立てる必要があると考えている次第です。



富良野とへそ祭り

富良野医師会 会長 小山内裕昭

富良野は北海道の中央に位置し、山々に囲まれ自然に恵まれた土地。今年、北海道の「真ん中」をへそと見立て、お腹に絵を描いて踊る富良野の祭り「北海へそ祭り」が50年を迎えた。

へそ祭りは、1969年7月、富良野の商店街の人たちが町おこしのために「へそを活かした踊りをやろう」と考案したもの。お腹にユニークな表情の顔を描き、本当の頭には傘をかぶり、腰に棒を通して腕にした。へそを出し、一見、かかしのようなその姿はとても珍奇で独特だった。

しかし、最初はその独特さから踊り手に手を上げる者がおらず、酒を飲ませることを約束するなど涙ぐましい勧誘の末、11人の勇気ある若者が初めて、へそ踊りを行った。参加者もたった290人だった。その後ワールドカップの開催や、旧国鉄カレンダーへのラベンダーの掲載などで富良野の知名度が上がり、さらには1981年開始のドラマ「北の国から」でへそ踊りが流れると、それを見た人々がこぞって祭りに足を運んだ。最近では海外の観光客も飛び入り参加して踊っている。第50回目となった今年、参加者は3,500人、1,000人以上が図腹で踊り、観光客も9万人を超えるようになり、時代と共にへそ踊りも変化してとても面白い。

町おこしで始まった「へそ祭り」だが、北真神社の例大祭というしっかりした位置づけもある。かつて富良野の開拓民たちは、心身の活力の源であり気が集まると言われる「臍下丹田(せいかたんでん)」に力を入れ、昼でも暗い密林を切り開き、田畑を整備し、今の富良野の町を作った。その精神をたたえようと、あえて「へそ」を中心にした踊りが作られた。

私も、富良野に赴任して26年間、気がつけば医者人生の半分以上を富良野で過ごしてきた。へそ踊りの音楽を聴くと、赴任してからの苦楽をたくさん思い出し、退官するまであと少しだが、へそ踊りの精神を見習って自分も富良野のためにまだまだ頑張らねばと思う。

来年はどんなへそ踊りが見られるだろうかと思いをはせつつ、筆をおこうと思う。